

プロデューサーは何でも屋

苦勞もプレッシャーもなんのその。エドコレを成功させるのがオレの仕事だ!!



エドコレ終了後。「7割の出来。疲れた〜」と大山くん。「学生の指導は楽しい。一生懸命だからね」と古川さん。

エドwコレプロデューサー大山聖文君インタビュー

昨秋11月3日、駒木祭で江戸川ガールズコレクションを主催した「江戸川大学EGC実行委員会」は、江戸川大学社会学部経営社会学科の学生たちだ。学生と言っても2年生と1年生だけ。学生スタッフを束ねるプロデューサー大山君を密着取材した。(取材: 志摩千尋 写真・レイアウト: 高山里歩)

学生の役割分担は、プロデューサー、演出ディレクター、スタイリスト、照明、音楽・映像、広報・宣伝の6つ。1年生は見習いだ。プロデューサーは、学生や協力者、出演者をまとめ、全体を統括し、大学事務局との連絡を取り、円滑に実施運営できるように準備する。役割は多岐にわたる。実施に至るまでの責任を負う大変な役割だ。そのため、6人もプロデューサーが必要で、そのリーダーが総合プロデューサーの大山聖文君(2年)だ。

「想像していたのとは、だいぶ違った。」でも、今思うとすごく楽しかったし、貴重な経験をしたと大山君は振りかえる。最初は、先生たちが企画して、資料も用意してくれて、自分たちは実行部隊でいいんだと思っていた。

エクセルは苦勞せず使えるものの、企画書、組織図、全体制作スケジュール表、役割分担表、当日の進行表と台本など大量の資料づくりに授業以外の時間は没頭しつづけた。

3年生の先輩が時々様子を見に来てくれて、「これはやっておいたほうがいいよ。」とアドバイスしてくれた。例えば、イベント当日に配るお弁当の発注管理表。お弁当が足りなくなったりしたら、大問題だ。さて、本番当日。ファッションショーはタイミングがすべてだ。音楽と同時にモデルと映像が出る。演出

ディレクターはメイクやフィッティングを秒単位で計算している。スタートでずれるとすべてが狂う。緊張がほとんど。家に帰ってもコレクションのことを考えてしまう日々が続いた。それでもトラブルは起きる。だが、考えぬいて準備をしたからこそ、古川さんの機転を受け止めて、ショーを続けることができたのだ。

だが、そこからタイミングが戻った。ショーの両車が完璧にかみ合いはじめた。モデルのがらもあって、完璧なフィナーレで終わることができた。「自分が考えを生み出してまとめてからでないと、人に相談すらできない。自分が考えた。最後にファッションコーズを指す人へ一言。「服が好きなら、専門学校に行つたほうがいい。服をデザインしたり、作つたりできるから。でも、大学はファッション業界を研究する場。ファッションを通じて、視野を広げたい人はぜひ江戸大に来て下さい。」

え、そんな事まで自分でやるの!

7月のゼミで中口哲治教授から説明をきいた。ところが、指導を受けても、自主的に動かないと何も進まない。甘い気持ちは消えた。打合せのために作成した資料は数え切れない。入学時に貸与されたパソコンと授業のおかげで、ワードや

音楽が早すぎる。さあ、どうする!!

張と不安が交差する。案の定、スタートでミスった。音楽が早く出てしまった。しかし、当日は強力な助っ人に来てもらっていた。数多くのファッションショーを手がけるJUNGLE GYM代表の古川史朗さんだ。彼の指示で音楽が一瞬、止った。会場が静まりかえる。